

日露戦争から崩御まで
各国からのメッセージと評価

世界が称えた明治天皇

日露戦争での勝利は、日本のイメージを一新しただけでなく、国の先頭に立つ天皇への認識も新たにするものだった。世界各国の人々の目に、明治天皇はどのように映ったのか

平間洋一

元防衛大学校教授

ひらま・よういち

日露戦争を境にした明治天皇観

日露戦争の勝利以前の日本に対する外国人の知識は、作家ピエール・ロティに代表されるエキゾチックな日本観であり、日本の近代化、日本の政治や経済、国民や教育制度などへの関心が高まったのは日露戦争以後であったが、とくに明治天皇に対する関心が高かったのはアラブ諸国などのイスラム圏であった。

それはアラブ諸国がスルタンの専制独裁下にあり、アラブでは日本の勝利とロシアの敗北を「専制と無智と抑圧の結果」ととらえ、「神助を得た日本の皇帝はアジアの王たちによき手本を提供している。もし、王たちが狩猟や黄金を極めた王宮での安眠の代わりに、その時間をすこしでも王国内の諸問題の解決と国民の福祉とを考えるために費やしてみるなら、彼らはきつとミカドの方策を模倣することになるだろう」と、明治

天皇の業績を見做うべき模範だとしたからであった。このようなことから、明治天皇の業績や評価についてはイスラム圏の報道が群を抜いていた。

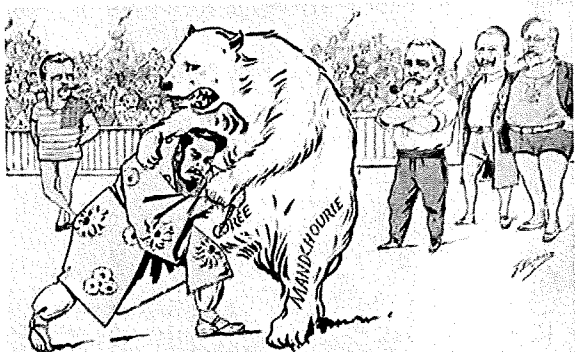
明治天皇在位中の評価

エジプト

エジプトでは、エジプト人を立ち上らせようとの願望からカミールが『昇る太陽』を書いたが、カミールは、「墓場から甦って大砲と爆弾の音を響かせ、陸に海に軍隊を動かす、政治上の要求を掲げ、自らも世界も不敗と信じていた国を打ち破り、人々の心を呆然自失させて、ほとんど信じ難いまでの勝利を収め、生きとしいけるものに衝撃を与えることとなったこの民族とは一体何者なのか。彼らはわずかの年月にこのような『高み』に達し、ある部分では西洋と肩を並べ、ある部分では追い越すまでになったのか。また夜を徹し

てこの民族のために力を尽くし、刻苦精励してその地位を高めている、かの偉大な人物（天皇）とは何者なのか」と、日本とエジプトを「前進者と後退者」、「勝利者と敗北者」「昇る太陽と沈んだ太陽」として比較し、エジプト人の奮起を促したのであった。

カミールが『昇る太陽』を出版した前後に、同じくエジプトでは国民的詩人イブラーヒーームが、「日本の



LE GRAND DUEL JAUNE ET BLANC

日露戦争時の風刺画。明治天皇が白熊（ロシア）に挑み、欧州各国が見守っている

乙女」という詩を書いたが、この詩はエジプトだけでなく、レバノンの教科書にも掲載され、現在でも多くのアラブ人に愛唱されている。歌詞は、「砲火飛び散る戦いの最中にて、傷つきし兵士たちを看護せんと、うら若き日本の乙女、立ち働けり」で始まり、なぜ危ない戦場に行くのかとの詩人の問いに、看護婦が答える。「われは日本の乙女、銃持ちて戦う能わずも、身を挺して傷病兵に尽くすはわが務め、ミカドは祖国の勝利のため死をさえ教え賜りき」と続き、その理由を「天皇は東洋を目覚めさせ西洋を揺るがせた。王者と仰ぐにふさわしいお方です。もし争いあつてみれば、天皇がいかに知略にたけ、あらゆる事柄に自在に対応なさるか分かるでしょう。帝国の揺籃時代には天皇も幼く、王冠もいまだ小さかったにも拘わらず、いまや帝国は栄誉の天空に登り、王冠はそこに輝く星となったのです。天皇が祖国を

死の眠りから甦らせ、栄誉のために全力を尽くせと号令をかけられるや、祖国は栄光の高みの頂点に達し、ついにすべての目的を達成したのです」と称えている。

イラン

一方、イランではシーラーズイーが『ミカド・ナーメ(天皇の書)』を書き、明治天皇は、「まず知恵と名誉を求め、国家の改革によって野蛮性が消え去り、国民が学問と技術の追究に努力した」そして、日露戦争では「全員が神の慈悲を信頼し、決して自らに傲慢にはならなかった」、その結果「神の慈悲が蟻(日本)を獅子に変え、この蟻によって象(ロシア)を打ち負かしたのだ」と書き、「日本が我らの先駆者となつた以上、我らにも知恵と文化の恩恵がやってこよう。どんな事柄であれ我らが日本の足跡を辿るなら、この地上から悲しみの汚点を消し去ることができらるだろう」と日本の近代化と、その



イスラム教徒の団結を目指したトルコ皇帝ハミット2世

指導者としての明治天皇を賛美している。

明治天皇をカリフ(盟主)に

トルコ

イスラム教国が協力してキリスト教国に対抗しようとする動きは、イスラム教の誕生以来存在していたが、トルコ皇帝アブドル・ハミット二世がイスラム教徒の団結を国策としたこともあり、トルコ皇帝を盟主(カリフ)とし、エジプト国王を副カリフとして団結し、西欧帝国主義に対抗しようとトルコ系民族やモンゴルからフィン族の間に、汎イスラム主

義、トゥラン主義とも呼ばれる運動がユーラシア大陸に拡がっていたが、日露戦争で異教徒の日本がキリスト教国に勝利したことから勢いを増した。

一九〇五年(明治三十六)にはタタール系トルコ人ジェウデトが「ロシアと日本」との論文で、日本がもしイスラム国家となれば、明治天皇をカリフとするのが適当である、そうすればイスラム諸国の団結はますます強固になるであろうと主張した。イランではタバタバーイーなど立

憲派学者が、天皇に電報を打ちイスラム社会への支援と保護を求めた。また、一九〇六年八月に天皇が宗教会議を開催し、各宗派の代表を集めて討論させたうえで、日本に最もふさわしい国教を決定する予定である。しかもイスラム教が最有力候補だとの情報アラブの新聞に報じられると、「奉天平原の勇者よ、願わくばわれらの言を信ぜよ。もし新たに宗

教を採用せんと欲すれば、ただ回教あるのみ」と、日本にイスラム改宗を呼びかけた檄文を送ったという。また、一九二一年(大正十)三月にはヘチアスの王族アルカデリーが、イスラム民族連盟大会の極東駐在代表として来日し、アラビア、インド、エジプト、トルコのイスラム教徒がメッカで開かれたイスラム教徒代表者会議で、明治天皇を盟主と仰ぐことが決議されたと伝えた。

明治天皇崩御後の評価

明治天皇が崩御されると、哀悼の意と賛美が溢れたが、代表的なものを次に列挙したい。

『ジャム・エ・ジャムシエツト』

—インド

インドの『ジャム・エ・ジャムシエツト』紙は、「日本国天皇陛下の崩御は日本帝国と進取的国民のみならず、全アジアに対し将来長く充たすことができない欠陥を生じた。常

に優越を誇った欧米の一大強国に日本が勝利したのは、日本人が勇敢であつたとはいえ、天皇が不撓不屈の精神で全軍を指揮し、内政を適切に指導し西欧諸国のアジアへの侵略を制止したことによる。この戦争は天下無敵と自負し、アジア人を蔑視していた欧米強国を反省させ、またアジア民族を覚醒させた。このような大君主の崩御に世界各国国民がことごとく、哀悼の情を表するのは当然である」と報じた。

『ニューヨーク・ウォールド』

—アメリカ

一方、日露戦争後に反日に転じたアメリカでも、ウイリアム・ハワード・タフト大統領が「先帝陛下は非凡の統治者にして、熱心に政務に注意し文官武將を問はず、常に適材を適所に用い日本国民に光栄をもたらした。予は陛下に対しアメリカ政府ならびに人民の最も深厚なる同情を捧ぐ、希はくは長久繁栄なるご治世と日本帝国の福利の永続に対する予の満腔の祈念を嘉納し給わんことを」との弔辞を発した。

さらに反日で有名な『ニューヨーク・ウォールド』紙も「明治天皇は世界の帝王中、実に比類を見ざる英主なり、日本の天皇の如く連綿たる皇統を有する者一人もなし、先帝陛下は千年以上を要すべき国運の進展を僅かに六十年間の御在世中に成就し給えり。彼の温順なる菜食人民が日清・日露の両戦役において勇戦奮闘し、従容として屍を戦場に晒したる勇氣は、西洋人の夢想だにする

能はざるところなり、この英主の短き治世中の変革は驚嘆すべきものなり。先帝陛下は実に日本を象徴し陛下は日本人に取りては日本なり」と報じた。

『ル・フィガロ』

—フランス

同盟国のイギリスでは議会在が哀悼声明を決議し新聞も大きく報じたが、常に批判的なフランスでも、『ル・フィガロ』紙が、「明治天皇は、実に現代の一大英主なり、何となれば陛下の如き偉業を完成したる英主は世に一人もなければなり、陛下は平和の事業においても、戦時の事業におけるが如く偉大なる君主なり、陛下の治績は実に史上にその例を見ず」と報じた。

『ノルド・ドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイトウング』 —ドイツ

ドイツの『ノルド・ドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイトウング』紙は、「日本を近代的国家に導きたる偉業および日本国民の向上発展に関



イランで刊行された「ミカド・ナーム」



明治37年戦没陸軍観兵式記念の絵葉書

しては、先帝陛下の力が大なりしを疑はず。陛下は日本が真に世界的地位を占めるため、古来の神聖なる伝習・慣例の改廃を必要とするときは、毅然たる威厳を以て断然改廃し給えり。外国の新文明を採用し自国の旧習と国民の特性とを調和させることは至難のことなり、然るに陛下はこれを遂行し、以て過渡期の極めて危険なる改革事業を完遂され給えり。されば先帝五十年の治世中、日本は国家的・文化的及び経済的な根本的改革を了し、従来始ど何らの価値を認められざりし小国より発展して、一躍声望ある一大強国となれり」と報じた。

『ピルジエウイヤ・ウエドモスチ』

—ロシア

一方、日本と戦ったロシアでも『ピルジエウイヤ・ウエドモスチ』紙が、「先帝陛下の治世四十五年間に、日本は長足の進歩をなし何人も知らざりし小国変じて一等国となり、世界

因るなり。このような慈悲ある武士道的な行為が、陛下を神として崇敬する民族に及ぼしたる感化は西欧人には理解し難いところなり。先帝陛下は偉大なる人格者なり、さらに偉大なる政治家なり、また最も賢明な元首なり」と報じた。

日露戦争における日本の勝利は、帝政ロシアの圧制に苦しむ民族に光明を与えたが、明治天皇のリーダーシップを称えた国々は、ロシアの領土拡大を快くは思わないものの、東

の列強も日本の発言を傾聴し、その意見を参酌するに至れり。日本は建国以来二千五百年を経たり、然もこの長年月の進歩も、到底最近四十五年間の進歩発展には比すべくもあらず。この偉大なる進歩たるや、一に先帝陛下の賜なりとす。陛下の治世は（ヘミカド）の人格の表現にして、日本の国状を論ずる者は、皆その進展の根源を天皇に帰せざるはなし。日露戦争は吾人の極東の隣国に対する観察を新にさせしが、戦争以前よりわが国では先帝陛下を日本のピエトロール大帝と称したり」と書いてる。

『エスタード・サンパウロ』

—ブラジル

また南米では、ブラジルの『エスタード・サンパウロ』紙が、「日本は今や一大強国となり、国際権力の均整上に著しく世界の耳目を注目させるに至った。先帝陛下は稀代の英傑なり。一大統治者たる先帝陛下は、

洋人に無条件の賞賛を浴びせかける心情は持ち合わせてはいなかったはずだった。しかし日本の勝利の裏には、明治天皇の指導があり、天皇を戴く日本人が、天皇の威光の元で比類なき力を発揮したことに、驚きを禁じえなかつたのである。

悪用された明治天皇

明治天皇が崩御されると中華民国参議院は「天皇神聖の資を稟け、温恭の徳を立て、幼年にして踐祚し皇國を振ひ精勵して治を図り、一国強盛の基を築き東亜和平の局を保障し給えり」と決議した。

また、『アジア日報』は、「明治天皇に相当する偉人はロシアのアレクサンドル一世だけで、現在のドイツのウイヘルム大王、アメリカのルーズヴェルト大統領の如きは号して世界の偉人と称するも、その軍事上の功績を語れば先帝に及ばざるなり」と称えた。

その徳宏大にして偉大な天資を有し給う。全国民の今なお神の如くに皇威を仰ぎ、聖寿の無窮なるを祈るは誠に故なしとせず」と書き、アルゼンチンとともに大きな紙面をとり明治天皇の業績を称えた。

『レジスラー』

—オーストラリア

オーストラリアでは『レジスラー』紙が、「先帝の統治初期は国内は紛糾を極めたが、陛下は幕府最後の反抗者にも寛容の措置を採り給えり。すなわち海軍を指揮して最後まで反抗したりし提督を赦免せられたるのみならず、これを用い閣員に列し給いしが、この精神こそ最も顕著な国民性の一たる熱烈なる勤王心の根基をなせり。陛下は降伏したる叛徒に對してかくの如く寛大なりしのみならず、反乱者に対しても慈悲を垂れ給いたり。例えば偉大な武士西郷はその没後に生前に享有せし一切の勲位を回復せられたるが、それは叛徒の動機の純正なるを諒とされしに

しかし、それから六十年後には中国の明治天皇観は一八〇度変化し、「支那を征服せんと欲すれば、まず滿蒙を征服せざるべからず。世界を征服せんと欲せば、まず支那を征服せざるべからず。これ明治大帝の遺策にして我が日本帝国の存立上必要事なり」との「田中上奏文」を偽造し、敗戦後の東京裁判では「田中上奏文」の筋書きに沿って裁かれ侵略國家とされてしまった。

その後、「偽書」であることが世界的に定説となったが、中国は日本の中国侵略が田中上奏文の記述通りに展開されたと論点を変え、「文書の真偽」を「歴史認識」という問題にすり替えている。また、インドネシアやベトナムの教科書では、先の戦争を田中上奏文を引用し侵略戦争であったと教えられ続けている。

【参考文献】杉田英明「日本人の中東発見」東京大学出版会／宮内庁編「明治天皇記」第十一・十二巻、吉川弘文館